「女性の問題」とヴィクトリア朝小説

鈴木　万里

ヴィクトリア朝（1837-1901）は「小説の時代」とも呼ばれ，数多くの小説家が輩出し，膨大な量の小説が出版され，かつてないほど多数の読者を獲得した。小説はその時代背景と密接な関わりをもっている。むろん，優れた文学作品は社会状況が変わっても通用する普遍的なテーマを備えているが，また一方では，その当時でこそ重要な意味を担っていたものの，時の経過と情勢の変化とともにメッセージ性が薄れ，後世の読者からは見過ごされてしまうテーマもあるに違いない。本稿では，小説が執筆された時代のコンテクストから読み直すことによって，ヴィクトリア朝における女性をめぐる状況と問題が，どのように描かれているかを分析する。現代からは見えにくくなってしまった側面に光を当てる作業によって，当時の問題意識の所在や，作品が当時の読者に与えたインパクトを推察することができるはずであり，より多角的な視点で作品世界を把握することが可能になる。そのために，まず当時の価値観，人生観，とりわけ女性の置かれた立場を概観し，次に小説の果たしていた役割を把握し，それから個々の小説を分析していく。

1. 社会背景

私たちは女性の地位が次第に向上してきている，言い換えれば，時代を遡っていけば女性の活躍の場は狭くなる一方だと考えがちである。しかし，欧米で女性の社会的立場が最も低かったのは19世紀だった。なぜなら中産階級の女性に経済力がなくなり，父親や夫に扶養してもらわざるを得ない状況だったからである。ちなみに女性の地位が最も高かったのは，20世紀を除けば，10-13世紀（中世晩期）と先史時代（女性の労働がカロリーの70％の食料を調達していた）だという[1)]。それでも，16世紀頃までは，女性が家内制手工業や商業の場で生産や販売に従事することで経済活動の一部を担っており，欠くことのできぬ労働力と見なされた。女性が就くことのできる職

種もかなり確保されていた[2]。17 世紀に入ると次第に女性の活動の場が狭くなっていった。家と職場が分離し，それまで女性が主に従事していた，糸紬ぎ，機織り，醸造，パン焼き，石鹸や蠟燭作りなどが，大規模な資本を背景にした工場での大量生産に取って代わられ，女性は職を奪われていった。特に産業革命（1760-）以降，経済力を失った中産階級の女性たちは消費という形でしか経済活動に参画できなくなった。社会構造の変化に伴って，女性の立場は悪化の一途を辿っていく[3]。

近代社会は，身分制による封建社会が崩れた後の，平等な市民社会の成立が基盤になっている。それはフランス革命のスローガンである「自由，平等，博愛」にもよく現れている。しかし，実はこの「自由，平等」は，税金を支払える白人の成人男性だけが対象になっており，女性や外国人は排除されていた[4]。要するに，近代社会とは，もともとある程度の資産のある男性による，男性のための，独占的な競争社会として始まったのである。

経済力を失った中産階級の女性たちは，必然的に男性に依存せざるをえなくなる。他に生活の手段がないので，結婚だけが人生の目標になる。結婚できるかどうかは死活問題なので，男性にとって好ましい女性像を提示するために，「貞淑，従順，沈黙」という美徳を掲げて自らを売り込むしかない。女性に対する道徳的な締め付けは 17 世紀頃から次第に強まり，18，19 世紀と時代を経るにつれて更に非人間的なものになっていく。19 世紀ヴィクトリア朝の女性観たるや想像を絶するもので，「女性は，無垢で清純な存在であり，利己心や欲望とは無縁で，家族のために献身的に奉仕することが唯一の生き甲斐である」などとされていたのである。けれども，これは当時の男性が自分たちに都合のよい女性像を勝手に捏造して賛美したというだけではない。女性たちも率先して自らの市場価値を高めるために競って「自己犠牲」こそが女性の本質であると大いに宣伝したのである。

その一方で，科学者や知識人たちは，女性が男性より遙かに劣った存在であることを，最新の学問の成果を駆使して証明しようとした[5]。女性は動物に近く下等な生き物とされた。更に 19 世紀には植民地政策や戦争の影響で，英国国内で男性の人口比率が低かった。女性の結婚難は深刻な社会問題となり，女性の価値は一層低下した。1851 年の国勢調査によれば，未婚女性が 51 万人過剰で，20-40 歳の女性の 42% が未婚だったという[6]。一方，家父長制は絶大な権威をもち，当時の思想家 John Stuart Mill によれば，「夫は妻に対して殺人以外のいかなる残虐行為も可能であり，しかも夫がもし十分に用心深ければ，たいして法的処罰を受けることもない」[7] ほどに，女性

をめぐる社会状況は最悪を呈していた。19 世紀の社会を支配していたのは，このように極端な女性蔑視の価値観であった。中産階級の女性にとって最も過酷だった時代背景という視点から，小説を通して女性作家たちが何を表現したかを改めて考えてみることにしたい。

2. 小説の役割

まず，当時，小説がどんな役割を果たしていたかを把握する必要がある。小説とは，18 世紀に近代市民社会の成立とともに発達した新しい文学ジャンルで，それまでの特権階級であった貴族や地主に代わって，新たに台頭しつつあった中産階級の読者層を対象にし，規範とすべき道徳観，価値観，人生観を提示するという使命を担っていた。要するに小説は，どう生きれば立身出世ができるかという教育的なマニュアルの役を果たしたのである。当然，主人公は男性が多い。典型的な例として *Robinson Crusoe* をあげれば，無人島に漂着したゼロの状態から，富を蓄積し献身的な部下を手に入れ，故郷に凱旋するに至るまでのプロセスと，成功の鍵となった個人の独立心，合理的な思考，勤勉さ，節制，信仰心などが綿密に述べられ，これを手本に生きれば，資本主義社会での経済的成功が誰にでも可能である，無一文から資産家に変身できる，というメッセージが込められている。ここで重要なのは 'self-help' という姿勢であり，自分の力で人生を切り開いて成功を手にすることであった。身分制度から解放され，個人が能力を発揮して社会的階段を昇ることができる時代がようやく到来したことがわかる。

しかし，女性を主人公に据えると小説は，男性のように個人の能力を生かして自由に人生を選び取り，様々な経験を経て，時には危険を冒して成功に至るという展開を見せることはない。経済的成功という近代市民社会に特有の人生目標を達成するために，あらゆる経済活動から排除され財産権も持たなかった女性には，どのような道が残されていただろうか。女性を主人公にした場合，小説は顕著な特色をもつ。それは「シンデレラ型」つまり，美しく善良で従順なヒロインが，試練の末に立派な男性によって救われて結婚し幸福をつかむ物語である。注目すべきは，不幸または不安定な状況から脱して幸福を獲得するヒロインは，（男性主人公の場合とは異なり）自力で事態を打開するのではなく，男性の救助者が現れる点である。言い換えれば，ヒロインには積極的な問題解決能力が欠如しているが，却ってそれゆえに有能な男性を引きつけることができる。すなわち女性にとって幸福へのキィワー

ドは，「美」，「善良」，「従順」であり，結婚は必須なのである。

これらの作品は教養小説 Bildungsroman の形態をとり，ヒロインが様々な社交生活（舞踏会，訪問，散歩，観劇，買物，旅行など）を経験しながら人間的に成長していき，ふさわしい男性に出会って結婚するという happy-ending の物語である。典型的な例は，Fanny Burney（1752-1840）や Jane Austen（1776-1817）の小説であり，道具立ては異なるものの，Ann Radcliffe（1764-1823）の Gothic romance もこの範疇に入る。見逃してならないのは，「ふさわしい男性」は常にヒロインよりも階級，財力の上回る人物であり，ヒロインは結婚により社会的上昇を実現するという「出世物語」になっている点である。これは当時の社会状況を考え合わせれば当然とも言える。18-19 世紀には中産階級の女性たちに自活の道は皆無同然だったので，収入の安定した結婚相手を見つける以外に生活の手段は無かった。従って，小説は単に娯楽に留まらず，生きていくため，有利な結婚を実現するための手引き書でもあった。いわゆる「玉の輿」結婚の流行は，伝統的な身分社会が崩壊し始め，資本を蓄積した実業家を中心に社会の階層が組み替えられていった現象と，密接に関連している。17 世紀頃までは，よい結婚とは同じ階級内で行われるものであり，身分違いの縁組みは社会秩序を乱すものとして警戒されていた。18 世紀以降，中産階級が富を蓄積し上昇志向を強めた結果，上流階級との結婚という出世物語が人気を集めるに至る。この小説の系譜は，女中が奥様になる Richardson の *Pamela*（1741）に始まって現代まで書き続けられ[8]，女性の結婚願望をかき立てる役目を果たしている。

これ以外に，一見「シンデレラ型」とは異なるが，その変形と考えられる小説がある。それは，美しいが自分の意志をもつヒロインが，様々な試練を通して，騙され，裏切られ，不幸になり，多くは後悔しながら死ぬというピカレスク小説の形態である。Defoe の *Roxana*（1724）が典型例で，*Moll Franders*（1822）や Richardson の *Clarissa*（1748）もこれに近い。いずれにせよ，シンデレラ型もピカレスク型も，「女性は美しく，従順，善良でなければ，よい結婚ができず，幸福にもなれない」というメッセージを繰り返し女性読者に与え続けてきたことは明らかである。当時の中産階級の女性たちが置かれていた厳しい社会状況と，それに伴って課せられた（そして女性の側もやむをえず自らに課した）高い要求水準が反映されていると言えるであろう[9]。

3. 「恋愛結婚」の創出

とはいえ，たとえ社会構造の変化に伴って，貴族，地主階級の衰退と，中産階級の台頭が顕著になり，異なる階層間での結婚の機会が増えたとしても，社会的に極めて不釣り合いな結婚，とりわけ，経済的基盤のない若い女性が相当の財力を備えた男性を獲得する，という話の展開には不自然さが残る。近代に至るまで，古来から結婚とは，領地や資産を増やすことによって一族の安定と繁栄をめざすために行われた，政治的な色彩の濃い契約であった[10]。「本人の意思」が不可欠とは言っても，それは家長が娘または息子のために設定した結婚を（結婚相手を，ではなく）最終的に本人が確認するという意味に過ぎなかった。近代以降，個人の自由と幸福追求の権利が獲得されて初めて，結婚は本人の自由な選択によって行うことができる（少なくとも建前の上では）ようになったのである。しかし，個人の自由意志による相手選びは常に「不相応」という危険を伴う。男女の社会的格差を納得させる形で収拾する必要がある。ここで登場するのが romantic love に基づく「恋愛結婚」という新たな現象である。

本来，西洋における「恋愛」とは 12 世紀に南フランスの吟遊詩人によって作り出された形態であるというのが，定説になっている。これは，騎士が封建領主の奥方に対して忠誠と献身と敬愛を誓う，というものであり，女性の方が高位の既婚者であることから，成就させてはならない精神的な絆として高度に理想化された。すなわち，「恋愛」と「結婚」とは，決して両立しない現象であったことになる。言い換えれば，本来「恋愛」とは「結婚」という法的な絆の外で成立するものであった[11]。この伝統は，西洋の有名な恋愛小説がほとんど不倫小説であるという事実にもよく表れている。ところが，近代小説は，本来は対立概念であったはずの「恋愛」と「結婚」を結びつける，という離れ業によって，男女間の著しい社会的格差を一気に解消するに至った。そして，資産家の男性が激しい恋愛感情を抱くのも当然だと読者を納得させるために，女性主人公はあくまでも美しく，優しく，慎ましく，優雅で魅力的でなければならなかった。男性側もたとえ不釣り合いな結婚に対して心理的抵抗があったとしても，いったん恋愛に陥ってしまえば，格差など問題ではなくなってしまう。

このような状況と，男性側の心理的な変化は，Jane Austen 作 *Pride and Prejudice*（1813）の登場人物 Mr. Darcy に典型的な例を見ることができる。貴族につながる名門の出身で広大な領地と資産をもつ Mr. Darcy は，家柄

がはるかに劣り，低い親戚関係をもつ（叔父がロンドン下町の商人であることを指す）Elizabeth Bennet への愛着を断とうと努力を重ねたあげく，降参して求婚に至るが，手厳しく非難されて断られてしまう。その後，様々な経過を経て，Mr. Darcy は Elizabeth の優れた人格と魅力が，二人の社会的な格差を超越させるに足るものだと悟る。むしろ家柄の差よりは，Elizabeth のような賢明な女性に相応しい結婚相手として認められるだけの人間性を備えることこそが，対等な男女の望ましい関係を築く上で不可欠であるとの認識に達したのである。家同士の繁栄を目的とする近代以前の結婚観から，個人の幸福をめざす近代以降の結婚観への劇的な移行が，Mr. Darcy という登場人物の行動と心理の変化によって表されている[12]。見方を変えれば，Elizabeth の場合も，Pamela の美徳が彼女を女中から奥様に転身させたように，女性の精神的な価値は，男性の物質的に有利な立場にも匹敵するというメッセージを強調しているとも考えられる[13]。

しかし，いかに小説が romantic love の夢をかき立てようとも，中産階級の女性が社会的成功を実現する唯一の手段としてトレンド化した「有利な結婚」は，男女の極めて不釣り合いな関係を助長するものであった。女性側は美しさと愛，男性側は地位と経済力を有する。貨幣経済が浸透した大量消費社会にあって，財力を独占する男性が支配，女性が奉仕という主従関係が成立するのも当然と言える。しかも，男性の晩婚化，英国内の男性数の減少という条件が加わり，女性の結婚難は深刻の度合いを増していく。中産階級の女性にとっては，生活，生存のためなら相手を選ぶ余地はない。逆に資産のある独身男性にとっては選り取り見取りというアンバランスな状況を呈することになる。Jane Austen の *Pride and Prejudice* は，このような社会背景をもよく映し出している。安定した経済力を持つ Mr.Collins や Mr.Darcy は，姉妹ばかりで相続の見込みのない Elizabeth への求婚が拒絶されるとは夢にも思わなかったため，彼女の返事が信じられずに無神経な反応を見せる[14]。一方，同じく将来の見通しの暗い Charlotte Lucas は，洞察力を備えた賢明な女性であるにもかかわらず，親友 Elizabeth に断られた直後の Collins からの求婚に直ちに応じるほどに生活の安定を悲願としている[15]。（ちなみに Elizabeth が二人の求婚者をはねつけるのは当時の社会状況ではほとんど自殺行為に等しい。Austen は現代人が感じるほど保守的ではない。）従って，Emily Brontë の *Wuthering Heights* で没落した旧家の娘 Catherine Earnshaw が，無一文の Heathcliff を捨てて資産家 Edgar Linton との結婚を決意する経緯も，[16] 当時の読者にとっては許し難い裏切りというより，

むしろ当然のことと受け取られたはずである。女性が自分より社会的立場が低い，しかも生活力のない男性と結婚するなど，自殺行為に等しいと考えられた。「金のために結婚するのは愚かなことだが，金なしで結婚するのはもっと愚かなこと」という David Cecil の名言は，何も Austen の世界に限らず，18-19 世紀に生きた中産階級の女性にとっては実感であったにちがいない。

4. 女性作家たちの抵抗（1）Charlotte & Emily Brontë

このような，女性にとって極めて不利な背景にあっても，男女の不均衡な関係を告発し，その原因を分析し，新たな関係を模索した小説家たちが存在した。本稿ではヴィクトリア朝前期に活躍した Brontë 姉妹の小説，特にこれまであまり注目されることのなかった Anne の *The Tenant of Wildfell Hall* を取り上げる。3 人はそれぞれ異なった方法で小説の定型を破り，男女の人間としての対等性を主張し，「有利な結婚」によらない女性の新たな生き方を模索，提示している。それでは次に，個々の作品の中でどのようにしてそれらのメッセージが表現されているかを分析してみる。

Charlotte の *Jane Eyre*（1847）が革命的と言えるのは，それまで支配的であった「シンデレラ型」の枠組みを利用しつつ壊している，つまり脱構築している点である。「シンデレラ型」とは，美しく善良で従順なヒロインが，試練の末に立派な男性によって救われて結婚し幸福をつかむ物語である。ところが，この小説は，「美しくなく，従順でもないヒロインが，経済的自立と対等な男女の関係を求めて生きようとし，最後には財産と結婚を手にして幸福になる」という筋立てである。これは「美，従順，沈黙」という必要条件を否定して，「富，結婚，幸福」という結論を導く離れ業と言える。物語は「継子いじめされるヒロインが幸せになる」シンデレラと一見同じように展開するが，作者は周到に既存の小説の伝統的なパターンを改変している。具体例を，男女の出会いの場面，ヒロインの容貌，性格，考え方，結末のつけ方について検討してみる。

従来の小説では，ヒロインが馬車の事故などで立ち往生している時に偶然通りがかって親切に助けてくれた紳士と親しくなるという設定が，常套手段として用いられた。ところが Jane は，落馬して怪我をした紳士に手を貸す場面が最初の出会いとなる[17]。男女の役割が逆転していることに注目しよ

う。ヒロインの容貌については，作者は意図的に美人でない主人公を選び，'plain'（醜い）と繰り返し強調する。性格は，意志が強く理屈っぽく反抗的，これは女性としては最悪とされる。女性はあくまで優しく素直で従順でなければならなかったのだから。更に Jane の考え方は根本的にフェミニスト的である。経済的な自立を重んじ，結婚後も家庭教師を続けて給料を受け取り生活費に充てたいという提案や，Rochester 氏との対等な関係にこだわる姿勢にそれはよく現れている。

> '....I shall continue to act as Adele's governess; by that I shall earn my board and lodging, and thirty pounds a year besides. I shall furnish my own wardrobe out of that money, and you shall give me nothing but---'
> 'Well, but what?'
> 'Your regard; and if I give you mine in return, that debt will be quit.'[18]

婚約直後の Jane が，結婚後も自分は今まで通り家庭教師としての仕事を続け，夫に金銭的な依存をせずに，お互いが愛情と敬意のみを与え合うようにすれば，貸し借りがなくなるだろう，という革新的な提案をする際に，'that debt will be quit.'（債務を完済する）という経済用語を使って，対等な関係を主張している点は注目に値する。経済的な著しい不均衡が男女の立場のみならず，精神のありようにも深く関わっていることを示している。結婚だけが中産階級の女性たちの生活を保障する唯一の手段であり，しかも女性が仕事をして給料を手にすることを救いがたい堕落と見なした時代に，結婚後も経済的な独立を望む姿勢を明確に打ち出しているのは，対等の関係にこだわると同時に，結婚後も資産家の夫のステータス・シンボルに甘んじることなく，やりがいのある仕事を持つことで，充実した人生を送りたいとの願いが込められている。特に女性の本質を述べた一次の節は，ヴィクトリア朝の女性観に対する作者の反発と苛立ちが窺える。

> Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do: .... and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves...
> （女性はおとなしいと一般に考えられている。けれども男性と全く同じように感じ，自分の才能を発揮することを必要とする・・・女性はじっと家に閉じ篭っているべきだというのは，特権的な立場にある男性の心が狭いからだ[19]。）

出版当時，未婚の女性が読んではならない小説と言われたのも頷けよう。結末の男女の結婚についても，初めは住み込み家庭教師と裕福な雇い主という主従関係であったものが，最後には，叔父の遺産を相続して自立したヒロインと，火災で家屋敷を失い障害者となった男性が結ばれるという異例の展開で終わる。明らかに作者は「シンデレラ型」のパターンを意識的に逆転させてフェミニズム的メッセージを強調している。女性は父親や夫に服従するのが当然であった時代に，ヒロインが自らの意志と判断によって独力で生きる姿勢は，社会秩序を乱すものと危険視された。これは男性依存型の結婚志向を肯定する既存の小説が繰り返し伝えてきた教訓に挑戦した作品と言える。

Emily は *Wuthering Heights* (1847) で，Catherine の人生を通して，有利な結婚による社会的な上昇が破滅を引き起こす例を描いた。しかし生活の手段を確保するために他に選択肢が無かったという事情を考え合わせれば，「Heathcliff と結婚すれば二人とも乞食になってしまう」[20] という Catherine の言葉は，単にお金持ちの奥様になりたいという虚栄心ゆえと非難されるべきではなく，むしろ，財力のある夫を見つけなければ生きてはいけない女性の置かれた危うい立場を鮮明に浮かび上がらせるものであろう。それに対して娘の Cathy は同じような境遇でも Lockwood という資産家には見向きもせず，従兄 Hareton の真価に気づくようになる。二人の結婚は同類婚であり，対等な人間同士がお互いを理解し愛情と敬意を育てていくという理想の形を実現するものである。しかも，Cathy が Hareton に文字を教えることを通して教育を授ける[21] という意味では女性が上位とも言える。知的な面で女性は男性に劣るという通念に対するアンチ・テーゼと見ることもできよう。

更に，この小説では，女性にとって極めて不利な法律的背景が，重要な枠組をなしていることも強調しておくべきであろう。Catherine は跡継ぎの男子を生まなかったので，夫 Edgar の財産権はその妹 Isabella に移る。結婚すれば女性の財産はすべて夫の管理下に置かれるため，Heathcliff はそれを目当てに Isabella に駆け落ちをそそのかしたのである。しかも，Isabella は跡継ぎとなる男子 Linton を生んだので，Linton 家の不動産は Edgar の甥 Linton のものとなる。Edgar の娘 Cathy は Linton と結婚させられることによって，父親の死後受け継いだ彼女の動産も夫である Linton の管理下に置かれてしまう。Heathcliff は病弱な息子 Linton に財産委譲の遺言書を書かせることで，息子の死後 Linton 一家のあらゆる財産（動産，不動産）

を手中に収めることができる。このようにして Heathcliff は Linton 一族への復讐を果たすのである。すなわち，女性は未婚ならば自分の財産を管理できるが，結婚すれば自由に処分できず，夫に全権を委任するという法システムが前提となって，この小説の復讐物語は展開しているのである。作者の相続に関する法律の知識は極めて正確であると言われている[22)]。

5. 女性作家たちの抵抗（2）Anne Brontë

経済的な成功による社会的上昇が人生目標となった近代社会で，女性は資産ある男性のステータス・シンボルの役割と化していく。ゆえに女性にとっては結婚により上の階級に参入することが最大の関心事となる。逆に女性が下の階級の男性を伴侶として選択することは，自分のみならず家族にも不利益をもたらす[23)]ので，社会通念に反する行為と見なされる。にもかかわらず，Brontë 姉妹はあえてこのような選択を辞さない女性たちを描いていることは興味深い。

Charlotte は *Shirley*（1849）で，叔父の奨める准男爵の求婚を退けて貧しいかつての家庭教師と結婚する資産家の女性を登場させた。これは当時の価値観に対する著しい反逆と言える。しかし，このテーマをより詳しく扱ったのは Anne である。

Agnes Grey（1847）の女主人公 Agnes の母 Alice は地主の娘でありながら裕福な生活を捨てて貧しい牧師 Richard の妻となる。そのために相続資産を奪われ身内から縁を切られてしまうが，結婚生活には満足していた。夫の死後も娘夫婦の同居の申し出を断り，小さな学校を経営して能力を生かし，社会の役に立ち，自立して生きていこうという強靭な精神と行動力の持ち主である。また，*The Tenant of Wildfell Hall*（1848）の女主人公 Helen Huntingdon は夫と叔父の死後，広大な領地と資産を相続，管理する立場となるが，自作農（gentleman farmer）である Gilbert と再婚する。いずれも階級，財産ともに上に属する女性が，あえて下の男性を選択するという破格の行動をとっている。これは自己拡大を至上の目的とする近代市民社会の価値観に大胆にも挑戦する姿勢であるのみならず，当時の女性の法的立場を考えれば，極めて危険な行為でもある。なぜなら，この時代には既婚女性には財産権も親権もなかったため，結婚と同時に妻の財産はすべて夫の管理に委ねられることになり，また子供は夫のものとなったからである。母

親には養育権もなかったので，どれほど父親に重大な問題があっても，母親が子供を連れて夫のもとを離れるのは違法行為と見なされ，父親はいつでも子供または母子を強制的に連れ戻すことが，法律で認められていた[24]。(Helen が家出後，偽名を使い，兄との関係を隠してまで警戒して生活せざるをえなかったのはこのような背景があり，Helen 自身も法を犯していることを認識していたからである。更に，夫が病に倒れて看病に戻った時，Helen がまず最初にしたことは，子供の保護を自分に委ね，自分の判断でいつでも子供を連れ出してよいと夫に認めさせ，証人を立てて署名を迫ることであった[25]。もしそうしなければ，子供は取り上げられてしまったであろう。）とりわけ資産のある女性の場合，未婚ならば自分で財産を管理することができたので，危険な結婚をして無一文になるくらいなら，独身のままでいる方がはるかに賢明であると判断された。(結末での Helen の伯母 Mrs. Maxwell の Gilbert への言葉「姪がずっと独りで幸せでいられれば，私はもっと満足したことでしょうね」[26] は，現代の読者にはかなり無礼で悲観的すぎると聞こえるが，ごく常識的な意見であったのである。)

Anne は単に階級的に下の男性と結婚する女性を描くことで，人間には地位や財産よりも人柄が重要だと主張して，当時のトレンドに疑問を投げかけただけではない。Anne の小説で注目すべき点は，男尊女卑の現実を社会悪として訴えるに留まらず，アンバランスな男女の関係がどのような結果をもたらすかを考察し，原因を分析していることである。

まず，男性側もまた既成概念の犠牲者であることが示唆される。封建制度が崩れた近代以降は，実力主義の競争社会となったため，男性中心の社会構造が浸透していった。男性はあらゆる権利を独占したが，同時に責任も大きかった。妻子にどのような生活程度を保証できるかが男性の能力の証でもあった。だから，Agnes の父 Richard は自分のせいで妻に馬車やメイド付きの贅沢な暮らしを諦めさせ，苦労をさせていることをひどく苦にする。そのあげく投資に失敗しさらに貧しくなり，自分を責め失意の末に健康まで害し，立ち直れなくなってしまう。あるがままで満足するという生き方が受け入れられない社会は，男性にもまた過酷なのである。Gilbert Markham も同様に激しい挫折感を経験する。彼が知り合って愛情を抱き始めた頃の Helen は自活しなければならない身の上であり，ほぼ同じ階級に属するものと思われた。しかし約 2 年後に Helen を訪れた時，彼はあまりの格差に愕然とし，本来ならば知合いになる機会すらないような世界に住む女性であったことを悟って，自分の期待を恥ずかしく思い，黙って身を引こうとする。

Helen の側からのプロポーズすら理解できないほどに落胆しているのは，いかに愛情があっても自分には資格が無いものと諦めているからである。このように，女性の方が社会的立場が上であるために苦しむ男性像は，人間は平等であるとの考えの正当性を認めたとしても，やはり自尊心を傷つけられ，男性であるにもかかわらず女性に引け目を感じずにはいられないという意味では二重に劣等意識に苛まれ，いっそう物質社会の支配に囚われていることを示している。

さらに，Anne は，この時代の男性中心主義，物質主義の原因は女性側にも責任があることを指摘する。姉たちの作品と異なり[27]，Anne の小説には複数の母親が登場するが，自分の価値観を押しつけようとする支配的な人物像が多い。Mrs. Murray（*Agnes Grey*）は娘になるべく有利な結婚をさせようと必死に画策するし，*Mrs. Hargrave*（*The Tenant of Wildfell Hall*）は自分の満足する条件を備えた求婚者を娘が断ったことで，ひどく立腹する。いずれも，娘の幸福のためには社会的評価の高い結婚を実現する以外にはないと単純に信じ込み，相手の人格や娘の気持ちなどお構いなしの愚かで虚栄心の強い母親たちである。Rosalie は母親に劣らず自分勝手な娘で自業自得という感もあるが，Esther の方は良識を備えた誠実な女性なので，有利な結婚を画策する母親や兄の圧力と，自分の気持ちに忠実でありたいという願いとの間で苦しむ。意に沿わない結婚は避けたいが，かといって未婚のまま家に留まれば母や兄に邪魔者扱いされることは目に見えていると嘆き，結局は母に降伏させられるのではないかと恐れる[28]。家長（兄）のみならず，女性である母親もまた共謀して娘を追いつめる構図が容易に見て取れる。女性が女性の味方であるとは限らないのである。

母親自身が男女の待遇に差をつけ，男尊女卑を助長している点も見逃せない。Mrs. Markham（*The Tenant of Wildfell Hall*）は明らかに娘よりも息子たちを大切にし甘やかしている。美味しいものは息子に取っておきたがるし，娘には許さないことも息子にならば大目に見る。いつも息子の満足を優先して娘には我慢を強いる。娘の Rose は ‘I'm nothing at all.’ と不満を隠さない。母親の教えは「家事について心すべきことは，どのようにすべきかと，男性にとって何が望ましいかということ，女たちはどうでもよいのだから。」[29] というものである。男性のみならず，女性もまた性役割による double standard を当然視していることがわかる。それを疑問に思う Rose や Esther のような少数派の批判はほとんど無視されるか，生意気だと非難される。母親による息子の育て方についての批判的な議論は Helen によって

更に展開され，*The Tenant of Wildfell Hall* の核心をなすテーマとなっている。

夫の怠惰な生活を冷静に分析して Helen は，過酷で不注意な父親とひどく甘やかす母親の教育に原因を見ている[30]。本能の欲求を抑えることもできず，困難を克服する精神力も持たない性格は母親による over-indulgence（放任）の結果と分析する。更に Helen は，息子の育て方をめぐって Gilbert や Mrs. Markham との間に交わされる議論[31] の中で，当時の一般的な教育方法，すなわち，男の子は試練に立ち向かわせて誘惑や悪徳に打ち勝つ精神力を養うべきであり，一方，女の子は純真で無垢な心が堕落しないように極力監視し保護すべきである，という二重規範を批判している。この男女を二極分化した教育方法は，前述したように当時の小説に描かれた人生モデルに典型的に見出せる。男性主人公は様々な経験を経て試練を克服し，自らの力で成功と幸福を手に入れる。それに対して，女性主人公は実社会の悪になるべく触れさせないようにして清純さと善良さを保ち，有利な結婚を招き寄せる。このような処世術は，Helen が辛辣に分析しているように，女性の人間性は男性に比べてはるかに劣るという前提に基づいている。美徳は誘惑に耐えてこそ身につくものだとされているにもかかわらず，娘は誘惑によって容易に堕落すると考えるのは，女性は本来悪に染まりやすい弱い精神の持ち主であると暗黙のうちに認めていることになる。Helen は「どうしてそんな差別をなさるのでしょうか」と Markham に尋ねながら，「女性は知識を持てば持つほど，自由を広げれば広げるほど，堕落が深まる」のに対して，「男性の本質は善であって，優れた不屈の精神で守られているために，試練や危険で試されれば試されるほど，更に磨かれる」という考え方の矛盾を指摘する。これはヴィクトリア朝に典型的に見られる性差別の本質と問題点を見事に突いている。一方，Helen の支持する教育方法とは，「男女ともに，他人の経験や偉人の教訓から，悪を拒み善を選ぶことを予め学ばせて，悪徳を体験せずにすむようにしたい」というものである。これは，男女間に差をつけていない点と，悪に晒されれば誰しも堕落するという悲観的な人間観に特徴があり，当時普及していた性別の捉え方への挑戦とも言える。

ヴィクトリア朝は男女の差異が最も強調された時代であった。17 世紀頃から，生理学や解剖学の研究成果の影響もあって，男女の相違点に関心が集まるようになる[32]。18 世紀以降，中産階級の社会進出が盛んになると，「男は仕事，女は家庭」という構図ができあがり，男性は社会での活動にふさわ

しい性質，体質を備えており，逆に女性は家庭生活に向いているという論調が浸透していく。あらゆる学問領域，ジャーナリズムがその説を補強するようになる。「男らしさ」と「女らしさ」との差が強調され，前者は，行動力，判断力，論理性，正義感，知性などを表し，後者は，優しさ，従順さ，道徳心，感情の豊かさを特色とする。更に19世紀には排卵のメカニズムが解明され，女性は自らの意志とは関わりなく，受動的に母親になる存在であることから，自己犠牲と奉仕が女性の本質であるとの説が主流となる[33]。過酷な競争社会で様々な誘惑や悪徳に曝されて，心身共に傷ついた男性を癒し，慰めるために，喜んで奉仕するのが女性の役割であり，本性であるというイデオロギーが確立したのである。

従って，Helenが第3章に展開される教育論の中で，当時の性役割を最大限に強調した考え方に異を唱えているのは，極めて大胆な挑戦と言える。しかし，女主人公がこのようなラディカルな人間観を明らかにすれば，当時の読者層からは「女性らしくない」，「非常識」，「反社会的」との致命的な烙印を押されかねない。*Jane Eyre*がそうであったように。それゆえHelenが革新的な意見を抱くに至るのも当然だと読者を納得させる事情が，Gilbertに手渡した日記の中で詳しく語られることになる。第16章から44章まで延々と続く体験談は，小説の冒頭第3章で述べられた命題「男は強いから，試練に挑戦させて人生を勝ち抜けるように育てるべき，女は弱いので保護して善良さを保つべき，という考え方は誤りである」を証明する過程となっている。

しかし，Helenも初めから新しい女性としての生き方に目覚めていたわけでは決してない。むしろ娘時代には当時主流であった「女性の役割」を喜んで果たしたいと願っていた。結婚前にHuntingdonの生活が品行方正とは言い難いという噂が耳に入っても，伯母の忠告を聞き入れようとはせずに，「罪を憎んでも罪人を愛する」と答え，「自分の影響力が夫を過ちから救える」と自負し，夫が誘惑に陥らないように全力を尽くして破滅から救済したいという使命感を抱いていた[34]。ヴィクトリア朝時代，女性は道徳心と善良さ，愛情深さに関しては男性を凌ぐので，男性によい影響力を及ぼすことで家庭の幸福の中心となる，といういわゆる「家庭の天使」像がもてはやされた。女性は家の中の「司祭」として精神的支柱に祭り上げられた。この背景には，17世紀から18世紀にかけてのピューリタニズムと福音主義という宗教運動が大きく関わっている。

もともとピューリタニズムは，精神的，社会的な修養の場としての家庭の重要性を説き，女性の存在を重視した。しかし一方で，聖書に従って家父長制家族形態を厳格に守ろうと努め，女性の貞節を男性の財産と考え，女性の活動を実質上家庭内に限定したのである。男性が外の経済活動の場で競争するのに対して，女性には非物質的な（精神的な）価値という別の領域を設定することになった。ピューリタニズムが衰えた後も，精神的な価値の中枢としての家庭という考え方は，18 世紀の国教会福音派に受け継がれ，拡大されていった。そして，モラルの中心として精神的な「影響力」を及ぼすことで，女性は，家庭の平安のみならず，社会の教化にも役立ち，伝統的父権制社会の価値観と階層を支える役割を果たしたのである。このような宗教的背景に加えて，18 世紀には中産階級の台頭に伴う経済的，政治的な社会変化が，女性の位置づけを決定づけることとなった。資本主義社会での競争が激化して，外の世界での名声や富の追求に伴うモラルの低下やフラストレーションが高まるにつれて，内なる「家庭」という「癒しの場」が極度に理想化され，女性の精神的価値が強調されることとなった。（法的，社会的価値としての女性は実質上は無であったにもかかわらず）その結果，女性の行動や性質に対する要求水準は極めて厳しいものとなっていくが，女性たちはその二重基準を性差別とは考えずに，むしろ女性の優位性を示すものととらえて，自らの役目を競って果たそうとしたのである[35)]。

従って，Helen もまた努力と献身によって夫を正しい道に引き戻し，改心させることを喜んで自らに課したのであった。ところが，現実には夫の素行は改まらないばかりか，ますます悪化するばかり。Helen の忠告や配慮も無視されるか悪意に解釈され，女性の良い「影響力」という神話は脆くも崩れ去る。‘a pet’ であるよりも ‘a friend’ でありたいという願い[36)] も空しく，夫が家庭教師という名目で愛人を家に引き入れるに及んで，Helen は激しい挫折感を味わうことになる。「自分の分別と節操が夫を矯正できる」という高邁な理想どころか，家庭の中でさえ如何に女性が無力であるかを実感したはずである。また，愛のためのみに結婚するという愚かさも身に沁みたはずである。対等の人間同士としての愛情に基づいていなければ，ペットと同様なのだから。ロマンティックな恋愛観，結婚観だけでは通用しないことは，Helen と Milicent の会話で明らかにされる[37)]。夫を心から敬愛できない Milicent は，結婚に必要なものは ‘true affection’（本当の愛情）と ‘well-grounded esteem’（十分な根拠のある尊敬の念）であると語る。愛情のみ

で尊敬の念なしに結婚したHelenには厳しい言葉に響いたことであろう。しかし，このような過酷な体験を経て，読者もまたHelenが提示した命題の真の意味と正当性を理解していくことになる。更に，Helenが最初の結婚の失敗から学んで，次に人格や考え方の点で敬意を持つことのできる，対等な人間同士の結びつきへと向かって新たな人生を積極的に選び取る決意を固める展開に，共感を抱くことができるのである。

Helenの日記には更に，「家庭内暴力に如何に対処するか」という深刻なテーマが含まれている。それはCharlotteが *The Professor*（1857）の結末で提示した問いかけ「もし夫が非人間的な救いがたい男であったら，妻はどのように生きるべきか」[38]への解答でもある。この時代には家長の権限が絶大であったため，たとえどんな事情があっても妻が家を出たり，夫の元を離れることは激しく非難された。一方，夫の横暴や虐待に苦しむ女性も少なくなかったのである。夫に監禁されたり，精神病院に幽閉された女性の例もある[39]。女性にとって極めて不利な社会状況の下で，家庭が無法地帯と化した場合に対するCharlotteの結論は次のようなものである。「もし妻の本性が夫の性質を忌み嫌うならば，結婚とは奴隷状態にならざるを得ない。奴隷制には反抗すべきであり，その代償が拷問であっても危険を冒すべきだ。自由は欠かせないものなので，自由への唯一の道が死の門を通っているとしても，通らなければならない。私は力の限り抵抗し，力が尽きれば死という避難所が得られるだろう。」（Francesの言葉）姉がこの深刻な問題を単なる架空のエピソードとして使ったのに対して，AnneはこれをHelenの結婚生活の中で十分に展開して見せたのである。そして，もし夫が耐え難い人物であったら，法を犯しても夫の元を離れ自活して，人間としての尊厳を守るべきである，と大胆にも主張している。しかし，中産階級の女性が働いてお金を稼ぐことを取り返しのつかない堕落と考えたヴィクトリア朝の時代背景では，これは当然非難される行動である。その批判をかわすために，Helenは夫が病に倒れたときに直ちに看護に戻り，決して妻の務めをないがしろにするような不道徳な女性ではないことを示している。にもかかわらず，「夫のために他のあらゆることを犠牲にするのは許せない弱さである」[40]というHelenの自己主張は特に注目に値する。なにしろ，「夫や子供のために他のあらゆることを犠牲にするのが妻の務めであり喜びである」という信念が社会に浸透していたのだから。

以上のように，Anne は主人公が読者の反感を買わないように慎重に注意しながらも，女性の生き方について，男女の関係についての新しい提案を込めている。経済的な成功という自己拡大が人生の目標となった近代市民社会で，女性が自分より地位，財産の劣る男性を選ぶことだけでも画期的な試みである。更に，経済力で男性を序列化しないこと，生活の物質的な安定よりも，対等な人間同士としての共感を重視することを訴えた。これは女性のみならず，男性にとっても有意義な提案であったはずである。また，家族のために自らを犠牲にすることを女性の美徳とする考え方にも異議を唱えた。そして，経済的に自立することによって中産階級の女性に自信と尊厳を取り戻すことも奨めている。これらの主張は現代の読者から見ればごく当然のことなので，同時代の読者にどれほどのインパクトを与えたかが見えなくなっている。しかし，急激な社会構造の変化に伴って，女性の地位が最も下がった受難の時代に，品格を失わずに生きる道を模索した女性たちの苦闘という観点から見れば，当時の様々な作品を更に広い視野で捉えることができよう。この後，結婚で終わらない，または敢えて結婚を選ばない新しい女性像が次々と描かれるようになるには，世紀末まで待たねばならない[41]。ヴィクトリア朝の小説では「結婚」で終わるという定型が根強く，一般読者もまたそれを当然のこととして期待したからである。「自由」「平等」を大原則としたかに見える近代以降の時代は，皮肉にも男女の差異を必要以上に強調し，性役割を最大限に押し進めるパラダイムを構築してきたことになる。その困難な時期にあっても，矛盾を鋭く暴きそれを果敢に表現したこと，そして当時小説がもっていた社会的影響力の大きさを考慮に入れれば，恐らくは少しずつ読者の意識を改革していったことも忘れてはならないであろう。そして，これまで保守的と考えられがちであった Jane Austen や Anne Brontë の作品もまた新たな視座で見直されるに違いない。

注)

1) 辻村みよ子，金城清子『女性の権利の歴史』(岩波書店，1992) p.12.
レジーヌ・ペルヌー『中世を生きぬく女たち』(白水社，1988) p.2.

2) 例えば，1320-1500年のフランクフルトでは，女性のみの職が65種，男女同数の職が38種，男性が多い職が81種だったという。(レジーヌ・ペルヌー，p.262.)
フランスで国家のあらゆる役職に女性が就くことを禁止したのが，1593年ルメートルの判決であった。(p.344)

3) Jane Spencer, *The Rise of the Woman Novelist* (Blackwell, 1986) pp.13-14.

4) 辻村みよ子，金城清子『女性の権利の歴史』pp.33-34.

5) cf. シンシア・イーグル・ラセット『女性を捏造した男たち--ヴィクトリア朝時代の性差の科学』(工作舎，1994)

6) Mary Poovey, *Uneven Developments--The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England* (Univ. of Chicago, 1988) p.4. また，1801年にも既に女性の過剰が明らかで，18世紀も大部分同様の状況が続いていたらしい。cf. Jane Spencer, *The Rise of the Woman novelist*, p.14.

7) John Stuart Mill, 'The Subjection of Women' in *Essays on Sex Equality* (Univ. of Chicago, 1970) p.163.

8) 現在120か国で刊行されているハーレクイン・ロマンスは，女主人公の結婚で終わるハッピーエンドの形態をとる。しかも，結婚によって社会的上昇を果たすパメラ型の筋が圧倒的に多い。

9) 男性主人公の性的逸脱は，若気のいたりとして大目に見られたが，女性ならば厳しく罰せられるという二重規範が一般的であった。

10) これは，洋の東西を問わず，原始社会にも当てはまる。レヴィ・ストロースによれば，結婚は，男性の親族集団同士の間で，「財産」としての女性を交換するシステムである。

11) cf. モーリス・ヴァレンシー『恋愛礼賛』(法政大学出版，1995) および，アンドレアヌス・カペルラヌス『宮廷風恋愛の技術』(法政大学出版，1990)

12) 家同士の利益の確保を結婚の最上の目的とする旧世代の結婚観は，Darcyの伯母Lady Catherineに顕著である。一方，romantic loveへの軽率な盲信は，Elizabethの妹Lydiaの駆け落ち事件で批判的に描かれている。

13) ただし，ここでは女性の価値が，従来の小説のように「美，従順さ」ではなく，「すぐれた判断力，行動力，活発さ，人に媚びない態度」などとされている点は重要である。また，女主人公Elizabethが姉のJaneほどの美人でないという設定も画期的である。

14) *Pride and Prejudice*, chapter 19 & 34.

15) *Ibid*., chapter 22.

16) Emily Brontë, *Wuthering Heights*, chapter 9.

17) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, chapter 12.

18) *Ibid*., chapter 24, p.298 (Penguin).

19) *Ibid*., chapter 12, p.141 (Penguin).

20) Emily Brontë, op.cit., chapter 9.

21) *Ibid*., chapter 32.
22) Charles Percy Sanger, *The Structure of* Wuthering Heights (1914). rep. in *Brontë Society Transactions*, Part LXII(No.2 of Vol 12) 1952, pp.100-105.
23) 格下の姻戚関係ができるというのみならず，姉妹たちが将来の夫となる望ましい独身男性と近づきになる機会をも奪うと考えられた。
24) 当時の女性の法的立場はローマ法に規定されており，結婚の間は女性の法的な立場は中断され(suspended)，夫の立場と同化すると考えられた。(独立の立場を認められない)この小説では，1827 年から約 2 年間の出来事が語られる。1839 年の法 (Custody of Infants Act) により，7 才までの子供に対する母親の保護権が認められるようになったが，それ以前は父親のみが子供の保護権をもっていた。
25) Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, chapter 47.
26) *Ibid*., chapter 53, p.489 (Penguin).
27) Charlotte と Emily の小説は，母親不在の文学であるとしばしば指摘される。
28) Anne Brontë, *op.cit*., chapter 28.
29) *Ibid*., chapter 6, p.78 (Penguin).
30) *Ibid*., chapter 25.
31) *Ibid*., chapter 3.
32) 荻野美穂「女の解剖学--近代的身体の成立--」，『制度としての〈女〉』(平凡社，1990)，pp.13-76.
33) Mary Poovey, *Uneven Developments*, pp.6-7.
34) Anne Brontë, *op.cit*., chapter 17, p.166 (Penguin).
35) Mary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer* (Univ. of Chicago, 1984), pp.6-11.
36) Anne Brontë, *op.cit*., chapter 23.
37) *Ibid*., chapter 32.
38) Charlotte Brontë, *The Professor*, chapter 25.
39) 男性 (夫) に監禁された女性を扱った小説としては，Mary Woolstonecraft, *The Wrongs of Woman, or Maria* (1798), Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (1847), Wilkie Collins, *The Woman in White* (1859-60) などが有名である。
40) Anne Brontë, *op.cit*., chapter 48, p.438 (Penguin).
41) 1880-1890 年代には小説のヒロイン像に大きな変化が現れる。cf. 川本静子「世紀末の〈新しい〉女たち」1～24，『英語青年』1995 年，4 月～1997 年，3 月。

(本稿は 1997 年 4 月日本ブロンテ協会公開講座で行った講演に加筆をしたものである。)